# 西洋住居史

## 石の文化と木の文化

後藤　久　著

彰国社

## はじめに

本書は住居の通史であるが、「石の文化と木の文化」というサブタイトルをつけている。ローマに誕生したラテン系民族の「石の文化」が環地中海を支配して古代を彩る一方、もう一つヨーロッパには新石器時代の森の中に誕生し、中世を支配したゲルマン系民族の「木の文化」がある。前者では一つの建物の中にさまざまな階層の人たちが階を異にして住み分ける「複合階層」の住まい方が古代から見られるのに対し、後者は戸建てを基本とし、集合住居であっても一つの建物に生活水準の同じ人たちが住む中世以来の「階層別」の住まい方である。私たちは西洋住居史を学ぶうえで、この石と木という二つの異なる文化の中に根ざした特質が存在していることを忘れてはならない。

しかし一方で、住居史の中には民族も時代も越えた幾つかの共通した姿も見られる。例えば、上の階層の住居に憧れて下の階層の人たちがそれを模倣し、自分たちの財力に合わせて規模を縮小単純化しながらも実現させるときの姿である。宮殿や大規模住宅の中でこそ実現可能であった豪華な社交空間を、より規模の小さい住宅の限られた空間の中に圧縮して再構成したとき、そこには当然ひずみが起こり、そのために家族の日常生活の空間が犠牲にされたことはいうまでもない。

また、文化的に遅れた地域の住宅は、本質的に変わっていないにもかかわらず、見た目だけを先進地域と同じにするなど、追いつくための姿が見られる。近世初頭のイギリスにおける貴族住居は、間取が中世のマナハウスと同じでありながら、当時先進地域であったイタリアから近世ルネサンス様式の影響を受けて、外観を厳密な左右対称に整えている。こうした例は中世の町家にも見られる。石の文化圏に立ち遅れた木の文化圏において、初期の町家は間取もつくりも農村住居の踏襲に過ぎず、都市の独自性を備えていなかった。やがて敷地の有効利用から新しい間取が生じるなど都市機能を反映してその特質を形成していった。

ところで、本書は「住宅史」ではなく「住居史」である。「住宅」は建築物であるが「住居」はそこに住む人間の生活が主役となる。住居には建築的、芸術的に価値ある貴族の住まいがある一方で、その家の地下室で働き、屋根裏に寝る召使や、その台所を支えて周辺に住む農民など、建築史の中で取り上げられることのない支配者以外の民の住まいがある。先述のごとく人間の生活に視座をおくならば、一握りの支配者たちに比べ、圧倒的多数を占める民の住まいもまた各時代を支えた住居に違いない。

# 西洋住居史 目次

はじめに 3

序章 石の文化と木の文化 11

❶「石の文化」と「木の文化」 12
❷「住居史」と「住宅史」 15
❸「西洋住居史」と「日本住居史」 17

第一章 原始 ―洞窟から原始住居へ 21

❶狩猟生活から農耕生活へ 22
洞窟の住居 22 ねぐらから住居へ 26
❷木造の住居 33
ケルト人の住居 33 湖村の住居 36



第二章 古代 ―文明成立とラテン系住宅の形成 43

❶メソポタミアにおける集落の発生 44
練土住居と集落 44 中庭形式の住宅と「有心空間」の成立 48
宮殿建築の構成と「複合有心空間」の成立 50
❷エジプトの都市と農村の住宅 53
王宮の平面構成原理 53 貴族住宅の平面構成 58
泥造の農家と煉瓦造の町家 62
❸ギリシア・ローマ型住宅の完成 68
メガロン形式の住宅 68 中庭型住宅の展開 ―完成度の高い貴族住宅ドムス 72
高層集合住宅の出現 78 複合建築としてのインスラ 83

## 第三章　中世 ― 封建社会とゲルマン系住宅の展開　89


❶ 封建領主の住宅 ―― 90
城郭建築の発達と終焉 ―― 90　城の構成と日常生活 ―― 95　城から宮殿へ ―― 101

❷ 荘園住宅マナハウスと居住性の萌芽 ―― 104
マナハウスの基本形と有軸的空間の成立 ―― 104

❸ マナハウスの発展と居住性の向上 ―― 112
アイタム・モートに見るマナハウスの変遷 ―― 112
居住性の向上 ― ローマン・ヴィラからの影響 ―― 118　マナハウスの展開 ―― 124

❹ 中世農民と町人の住宅 ―― 126
中世農民の住宅と生活 ―― 126　中世都市の成立 ―― 132　町家の発生 ―― 136
フランスの町家 ―― 142　フッゲライ ― 初期の福祉住宅 ―― 152




## 第四章　近世 ― 貴族住宅と近世的住宅の定型　157


❶ カントリーハウスの変容と回帰 ―― 158
ルネサンスの影響とマナハウス ―― 158　ホールの衰退と新たな接客空間の誕生 ―― 162
近世農村住宅 ―― 169

❷ 近世住宅の形成 ―― 173
作画的意識の萌芽とヴェルサイユ宮殿 ―― 173
近世住宅の定型としてのコールズヒル・ハウス ―― 178

❸ 都市型住宅の形成 ―― 182
テラスハウスの誕生 ―― 182　テラスハウスからローハウスへ ―― 190
新世界アメリカの住宅 ― 入植者たちの住宅 ―― 195

❹ イタリア都市貴族の館・パラッツォ ―― 203
近世イタリア都市型住宅の萌芽とパラッツォの誕生 ―― 203
一六世紀以降のパラッツォの展開 ―― 209　住居史資料としてのドールハウス ―― 212

第五章　近・現代 ―近・現代住宅の光と影　217

❶近代住宅の誕生 ―― 218
近代住宅の理念 ―― 218　近代住宅の問題点 ―― 222　近代建築運動 ―― 226

❷モダンリビングの誕生 ―― 234
インターナショナル・スタイルの確立 ―― 234　生活最小限住宅 ―― 240

❸戦後の発展と現代住宅の光と影 ―― 247
戦後の復興とモダニズムの再開 ―― 247　現代住宅の多様な展開 ―― 251
住宅におけるソフト面の充実 ―― 260　住居と環境共生 ―― 266

索引　271
図版出典・撮影者・提供者リスト　275
おわりに　280

# 序章　石の文化と木の文化

ローマに誕生したラテン系の「石の文化」は、長い間、環地中海を支配して古代を彩ってきた。しかしもう一つ、ヨーロッパの森の中に生まれ、時の流れの底流を脈々と生き続けていたゲルマン系の「木の文化」があった。やがて古代の終焉とともに「木の文化」は表流に躍り出て、閉鎖的な封建社会の中世を支配する。そして、戦いに明け暮れた中世が終わると、またしても流れは表裏入れ替わり、「石の文化」は近世ルネサンスを迎えて華やかに開花する。西洋住居の歴史から、ヨーロッパの中にある二つの異なる文化である「石」と「木」の確かな手応えが伝わってくる。

# ❸ マナハウスの発展と居住性の向上

## ❸-1 アイタム・モートに見るマナハウスの変遷

中世マナハウスの典型例の一つといえるアイタム・モート（Ightham Mote）は、イギリス南東部のケント州に位置するマナハウスで、一三四〇年頃に建てられている。騎士あるいはスクワイアの一三～一四世紀に建てられた典型的な住宅と見てよいであろう。創建以来何度かの増改築が行われてきた［図26］。

増改築の経緯がほぼ判明しているため各時代の建築的な流行や傾向を一つの住宅建築の中に見ることができ、住居史研究の史料価値が高い。今日なお保存状態が良く、増改築のたびに個室や暖炉が増えるなど、時代とともに居住性の向上を目指したことが見てとれる。アイタム・モートは一三四〇年頃に建てられ、初代の所有者は不明であるが、一三六〇年頃、コーン家が所有していた。当初は現

図26
アイタム・モート（Ightham Mote）の発展過程。ケント州、イギリス、一三四〇年～ 創建以来何度かの増改築が行われ、現在ではチューダー様式やエリザベス様式あるいはジャコビアン様式の要素も見られる。また幅五～六メートルの「モート」と呼ばれる堀で四方を囲まれており、防備の姿を伝えている。



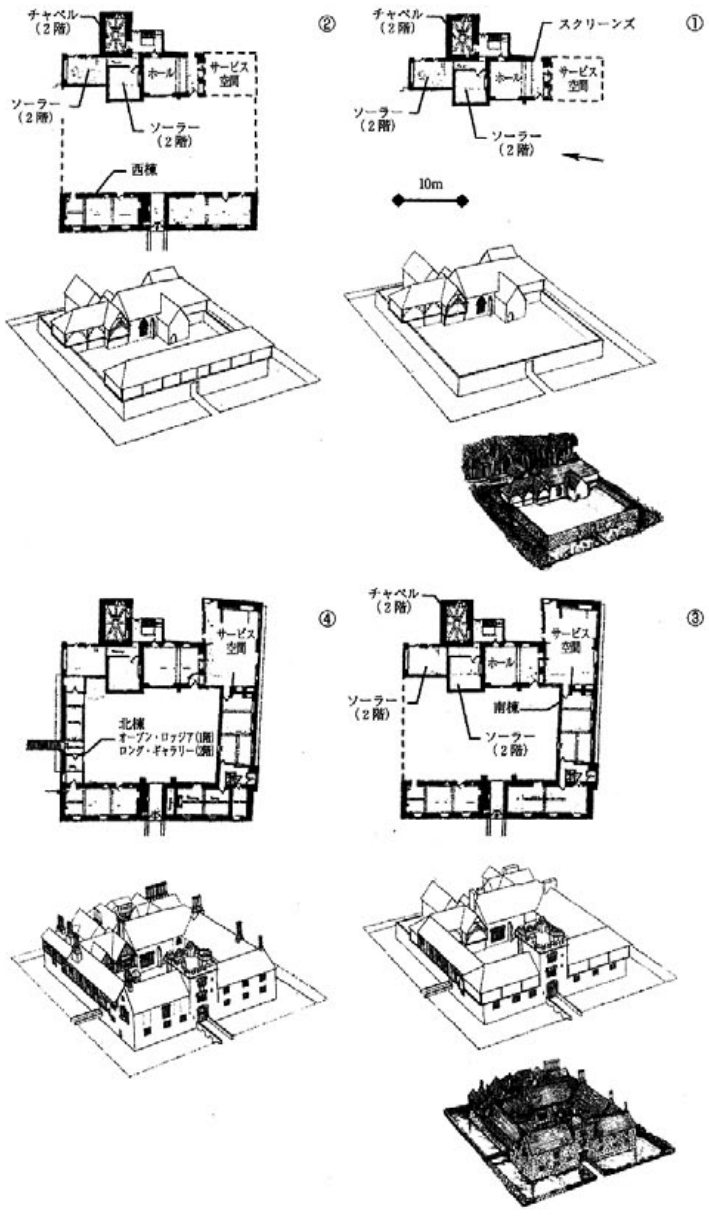

図45
シエナのカンポ広場。シエナ、イタリア、一三～一四世紀　広場はすりばち状にシエナ市庁舎に向かい、その高い塔と一体の美しい空間を構成している。

リアでは都市の有力者たちの抗争が絶えず、こぞって物見の塔のある住宅を建設し、一時はフィレンツェだけでも一五〇もあった。その高さは初期には五〇メートル以上もあり、後に三〇メートルまでに規制されている。旧都ボローニアや山岳都市サン・ジミニアーノには今もその面影を見ることができる［図46］。

城塞都市カルカッソンヌは、スペインとフランスを結ぶ戦略的な位置にあるため、宗教争いが起こるたびに要塞として利用された。街を囲む城塞は、古代ローマ時代からここを支配した者たちによって築かれたものが補強され、継ぎ足され、さらに二重の壁が築かれた。そして長い間に街全体を内包した城塞が出来上がっ

図46
中世山岳都市サン・ジミニアーノ　塔の街として代表的なサン・ジミニアーノは、当時の貴族たちが富と権力の象徴として塔の高さを競い、全盛期には七〇以上の塔が立っていた。



た［図47］。

一方、一三世紀に完成したフランスの都市モンパジェは、市門に通ずる幹線と直交する他の街路で整然とブロックに分けられている［図48］。またドイツにあって今なお最も中世都市の面影を残すローテンブルクやゴスラーは、いずれも一二世紀頃に市壁が建設されて都市が成立している［図49］。

ハンザ同盟で重要な役割を果たしてきたリューベックは、西から陸路で届いた品物をバルト海の航路につなぐ中継地として建設された都市である。ほぼ格子状の街

図47
城塞都市カルカッソンヌ。主として一三世紀、フランス　中世城塞都市の典型。古代ローマ時代からここを支配した者たちによって築かれた要塞が、補強され、継ぎ足され、長い間に街全体を内包した屈強な城塞都市となった。

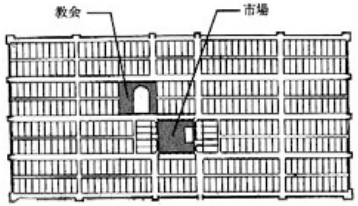


図48
整然と区画されたフランスの中世都市・モンパジエ　エドワード一世により一二八四年頃完成。直交する街路で二〇ブロックに分けられていた。その内二ブロックが市場に当てられている。

図49
ローテンブルクの市壁　中世の面影を保つドイツ・バイエルン地方のローテンブルクには、現在も市壁の一部が残されている。紀元前五〇〇年頃にはケルト人の集落であったという。一二世紀初頭、当時の支配者の城が築かれてから商人や職人の集落が発生し、急速に街として発展した。

図23
シュレーダー邸。ヘリット・トーマス・リートフェルト設計、ユトレヒト、オランダ、一九二四年　リートフェルトはオランダの近代建築運動・デ・スティール派の代表的建築家として、直線と平面による組合せから住宅計画の新しい理念を実践している。

図24
チューゲントハット邸。①外観。②室内。ミース・ファン・デル・ローエ設計、ブルーノ、チェコスロバキア、一九三〇年　傾斜地に建つため入口がある道路レベルと、傾斜した庭園側に二つの極の違った表情をもつ。バルセロナ博覧会ドイツ館の空間が住宅建築の中で単純化して再現されている。

がら、可動間仕切りを駆使して狭い住宅の空間を縦横に変化させるという住宅計画の新しい理念を実践している。

バウハウスは、一九一九年にワイマールで、社会民主主義的政府の後援の下に創立された新しい造形芸術の研究教育機関である。政治情勢の変化により一九二四年からデッサウ市に拠点を移したが、近代的工業生産を前提にした建築を追求し、やがて、近代的な建築の理念として、地域性を超えた近代主義建築の理念である国際建築という概念を確立した。



そして国際様式（インターナショナル・スタイル）は、国際的な普遍性を持つ新しい時代の合理的な建築として、鉄・セメント・ガラスという近代工業製品を用いている。そして従来の石や煉瓦による組積造に変わって柱梁による構造で、さらに装飾を否定するものであった。

バウハウスは、多くの実験住宅を試みているが、それらはモダンデザインの起点の一つとなったものであり、後にアメリカに亡命したドイツの建築家・ルードヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ（一八八六～一九六九年）の主張するユニヴァーサル・スペース（普遍的空間）という概念に基づくチューゲントハット邸へ、さらには、第二次世界大戦後のアメリカにおけるファンズワース邸や、彼の薫陶を受けたフィリップ・ジョンソンの自邸であるガラスの家へとつながってゆくものである［図24］。

また、アムステルダム派は、曲面を多用した柔らかい造形理念にもとづいた一連の住宅および集合住宅を建設した。彼らの造形は、職人の手仕事に依存する度合いの大きいもので、近代の大きな流れの中で消えてゆく運命をたどらざるをえなかったが、その表現性は豊かな住環境を考えるうえで、今日あらためて注目されている［図25］。

図25
アイヘン・ハールの集合住宅。ミケル・デ・クレルク設計、アムステルダム、オランダ、一九一九年　ヘンドリク・ペトルス・ベルラーヘのアムステルダム南部地区計画の一環として、アムステルダム派の代表的作品。煉瓦の壁、瓦屋根、そして立面の中心に塔を配した左右対称の構成からなるアムステルダム派の代表的な建築。